

令和2年3月19日

令和元年度 後期終業式 校長あいさつ

皆さん おはようございます。

久々の学校です。今どんな気持ちでいますか？

毎回の集会では、皆さんの様子をうかがいながらお話ししてきましたが、今回は放送で行います。皆さんの表情を想像しながら進めます。想像力は大事です。

何日前になるのでしょうか。次年度の教科書販売がありましたね。久しぶりに皆さんの様子を校長室から見ていました。多くの笑顔がありました。笑い声も聞きました。あー、学校はいいな、と心の底から思いました。こんな、当たり前のことができなくなるなんて、ついこの前まで信じられませんでした。

3月1日の卒業式も、本来ならば在校生の皆さんに見送られながらの風景となるはずでしたが、大きく様変わりです。しかし、そこにはこんな「卒業証書授与」の風景がありました。

あるクラスの代表の生徒さんが、呼名され、通路を壇上の方へゆっくりと、そしてしっかりした足取りで進んできました。その様子を想像してみてください。想像力は大事です。これで2回目です。そして来賓の皆さん、先生方へ一礼。どんどんこちらに近づいてきます。

その時、私は彼が必死に涙を堪えていることに気づきました。階段を上る頃には、とうとう堪えきれず大粒の涙が頬を伝います。「卒業証書 … 本学所定の総合学科の課程を修了したことを証する …」 その頃には、もうボロボロと彼の目から涙が溢れてこぼれ落ちました。私も、そして年次主任の宮本先生も壇上で上を見上げました。

彼がどんな思いでこの場所に立っているかは想像する（もう3回目です）しかありませんが、間違いなく、その涙に値する3年間の時の流れがそこにあったことは間違いありません。ひょっとすると、うれしいというよりも、どちらかと言えば困難な状況を過ごしてきた思い出が、彼の脳裏を駆け巡ったのかもしれない。

さて、今年の卒業式の式辞に、次のような話を入れました。

途中略しますが、しかしながら人生は良いことばかりとは限りません。時として、大変辛い時期を過ごすことになる事もあります。

私は今年の本校「図書館だより」に、村上春樹さんの『村上ラヂオ2』のなかに収められている「ベネチアの小泉今日子」というエッセイを紹介しました。このなかに、このような下りがあります。

「（前略）少しあと、一人でベネチアを旅行することがあった。当時、個人的にずいぶんつらいことがあった。胸が息苦しく、意識がぼらぼらになったままひとつにまとまらないような状態だった。（中略）この人生においてこれまで、本当に悲しい思いをしたことが何度かある。（中略）言うまでもないことだけれど、無傷で人生をくぐり抜けることなんて誰にもできない。でもそのたびにそこには何か特別の音楽があった。（後略）」

村上さんは、とても辛い状況の中、「異国の地」ベネチアで「ヘッドホンで繰り返される小泉今日子の歌」を聞いたようです。それが何であるかは明記されていませんが、いずれにしても、村上さんはこの場で小泉今日子の音楽を必要とした、ということがわかります。

卒業生の皆さん、どうか、あなたにとっての「ベネチアの小泉今日子」を見つけてください。もしそれが、本校での3年間のかけがえのない日々の一コマであれば、と強く願います。

皆さんも来年、そして2年後、本校の生活でかけがえのないものを見つけ、このような涙を流すことができるよう、取手一高での生活を見直してみてください。必ずや新たな視点が見つかるはずです。

最後になりますが、何度となく繰り返してきた取一精神「力耕不吾欺」。

「力耕不吾欺」は、中国の詩人 陶淵明の「移居」という二つの詩の最後の部分です。本校とつながりのあった小川芋銭が、請われて書いたのがこの「力耕不吾欺」。どのような思いで筆を執ったのかは想像するしかありません（これで4回目です）が、この扁額が校長室に掲げられています。「帰りなんいざ」で有名な「帰去来辞」の前、彼は、自ら官吏の職を辞したり、妹さんを亡くしたりと不遇な生活を送っていたようです。その後火事で家を失い、転居した後のことを記したものが「移居」。これが取一精神として受け継がれてきたことの意義を考えてみてください。

先の見えない日々が続きます。こういった時だからこそ、当たり前のことを当たり前にしてみませんか。これも何度となくお話ししてきたことですが、ありがとう、ごめんなさい、を素直に言えること。周りの方に対する感謝の気持ちと、間違ったときのおわびの言葉。この言葉を大事にするだけで、結構世の中はスムーズに回るものです。

臨時休校のためあまり実感のない日々となっていますが、明日からは春休みです。事故のないように生活してください。そして新たな年度がさらに素晴らしい日々となるよう、皆さんの心がけに期待します。